

追跡

東京調布。妊婦
たらい回し事件
夫が独占告白



意識不明の妻と 乳飲み子

「今日はお風呂に初めて入れてきたよ」
夫は妻に、毎日子供との出来事を話し続けている。
いつか妻が意識を取り戻し、
わが子を抱く日が来ると信じて――

往復2時間半の毎日

すでに、夜は明け、空が白みかけていた――サイレンを鳴らして走る救急車の中で吉田研一さん（仮名・39才）は、身重の妻・律子さん（仮名・32才）の、激しくけいれんする右手を必死に押さえつけていた。

乗っていた時間は30〜40分のはずだった。けれど、研一さんには2時間にも3時間も感じられた。

「病院がいくつも見たのに、通り過ぎていく。どうしてこんな遠くまでいかなければいけないのか。なんでだろう、どうしてと思っていたのですが、妻の手を押さえるので一杯で……」（研一さん、以下同）

* 東京都で立て続けに起こった妊婦たらい回し事件。吉田さん夫妻は、その1例の当事者であり、病院そして行政の怠慢や不備によって、何より待ち望んでいたおめでたい出産日を、悲運の一日にされてしまった。

律子さんの受け入れ先が決まったときには、すでに病院を探し始めてから3時間以上が経過していた。子供は無事だったが、十数時間に及ぶ開頭手術を行った律子さんは、いまだ意識が戻らないままだ。それから約2か月後の11月中旬の東京都内。

取材・監修/医療ジャーナリスト 伊藤隼也 文/山内リカ

「今日、子供を初めてお風呂に入れたんです」

笑顔で子供の話を話す研一さんの顔には無精ひげが残り、やはり疲れがうかがえる。「ぼくがしっかりしないといけないから——子供のことも妻のことも」

研一さんが、静かにあの日のこと、そして夫婦のことを語り始めた。

『いい夫婦』の日に入籍

研一さんは、律子さんと友人の紹介で知り合った。「生まれて初めての一目惚れ

でした」

初めて一緒に飲んだ帰り、自宅まで送る途中の道ばたで告白した。

「突然、ぼくが『つきあいませんか』っていったもんだから彼女もちょっと驚いていたみたいだったけれど、『あ、はい』っていつてくれました」

律子さんも同じ気持ちだった。次の日の朝、一人暮らしだった研一さんのために、手作りのお弁当を持ってきた。

「家庭的な女性なんだって、すごくうれしかった。ぼくにはこの人しかいないと思ったんです」

出会って3日目にプロポーズ

ス。

「おれと一緒にしろう」

律子さんは目に涙を浮かべてうなずいた。そして07年11月22日の『いい夫婦』の日に入籍した。

ふたりは、研一さんが住んでいた家より広い2DKの家に移り住んで暮らし始めた。08年3月に妊娠がわかり、6月には結婚式を挙げた。

律子さんは、少し大きくなったお腹にも合う妊婦用のウェアイングドレスを着て、ヴァージンロードを歩いた。

これから3人で暮らす幸せな生活が待っているはずだった。

出会った記念日の出来事

つわりもひどくなく、お腹の中の子ども順調だった。母子手帳には「正常」の2文字が並ぶ。少しずつ大きくなるお腹。月日は経ち、やがて臨月を迎えた。

そして迎えた9月22日。この日昼過ぎに破水した際、律子さんは仕事場にいた研一さんに「お腹が痛い」と電話をかけている。

「タクシーで病院に行くように」といいました。ぼくも仕事が終わって駆けつけましたが、『まだ(陣痛の間隔が長い)』というので、いったん自宅に

戻りました」

夕方6時過ぎ

に再び病院にいる律子さんから電話があった。

今度は「一緒にいてほしい」と頼まれた。そのため、研一さんは急いで病院へ向かった。

病院に到着してからしばらくは、律子さんは、普通に会話をしていたが、夜中になると容体が変わり始めた。

「どこかへ行かなくちゃいけない」

「いま行かないとダメなの」

普段はいわない寝言をいい始めた。大きないびきをかき始めた。

「そのあと彼女は目を覚ましたんですが、トイレに行くときも体の右側が思うように動かず、ベッドから落ちそうになったり、右足だけ、スリッパがうまく履けなかったり……。おう吐もしました。

病室について詳しくないけど、これは大変だってわかりました」

ナースコールで医師と看護師が駆けつけた。

医師は「脳に問題があるかもしれない。受け入れてくれる病院を探します」と告げた。律子さんは、緊急の手当てを受けるため、手術室に移

った。

研一さんは手術室の隣の部屋で椅子に座り、パニックでどうにかなりそうなお腹を抱え、とにかく無事でいてくれと祈り続けた。

病院側は、容体が急変した妊婦の受け入れ先探しに苦戦していた。杏林大学医学部附属病院をはじめ、複数の病院から断られていた。

研一さんが、医師から「受け入れ先が見つかりました」と告げられたとき、すでに外は明るかった。

「とにかく長かった。長かったんです」

害は)非常にレアなケース」とコメントしているが、実態は違う。

厚生労働省の調査では、06年の1年間に起こった妊婦の脳血管障害は184例で、そのうち、10人の妊婦が亡くなっている。脳血管障害は決してレアなケースではない。

「たらい回し事件はこれまでにも何回も起こっています。毎回、病院は『満床だから』とか、『緊急という認識がなかった』とか言い訳ばかり。

満床だったらそれを何とかするシステムを作るとか、緊急である認識を持つようにするとか、いろいろとやり方があるはず。何度も起きていてのに何も変わっていないのが口惜しいです」

11月22日、ふたりは初めての結婚記念日を迎える。研一さんは、妊娠してむくんだからと外していた結婚指輪を、律子さんにつけるつもりだ。「看護師さんに聞いてみないといけません」

そう話す研一さんの左手の薬指には、結婚指輪が光っていた。

【妊婦たらい回し事件】

9月23日、入院先の産科病院で脳出血を起こした東京都在住の吉田律子さん(仮名)が、杏林大学医学部附属病院(三鷹市)をはじめ、数か所の病院から受け入れを拒まれ、約4時間後ようやく都立墨東病院(墨田区)に搬送された。帝王切開で子供は無事に生まれたが、律子さんは緊急手術から2か月たったいまも意識不明の状態が続いている。

10月4日にも東京都では同じような事件が起きた。脳出血を起こした東京都在住の妊婦(36才)が、墨東病院など8か所の病院から受け入れを拒否された。搬送先の病院で出産したものの、妊婦は3日後に亡くなった。

2件の事件が起こった東京都には、妊娠中の母親やお腹の赤ちゃんを守るために「総合周産期母子医療センター」を軸にした緊急時の母体搬送システムが存在している。しかし、このシステムがほとんど機能していないことが、今回のケースで明らかになった。なお、いまから2年前の06年8月にも、奈良県の町立病院で分娩中に意識不明になった妊婦(当時32才)が19もの病院に受け入れを拒否され、死亡するケースが起こっている。

3110gの男の子を出産

23日午前7時10分に、受け入れ先の都立墨東病院に到着。そして帝王切開で午前7時55分には、3110gの元気な長男が生まれた。

「正直いって、ちょっとは救われた感じでした。帝王切開だとすぐ泣かないらしいので

すけど、うちの子はすぐ泣きやあきやあ泣いたらしくって、看護師さんに「すごく元氣なお子さんですね」っていわれたのがうれしかったです」

出産を終えた律子さんは、自身の手術のため、脳外科の手術室へストレッチャーで運ばれた。その途中に祈りながら呼びかけた。

「子供は無事生まれましたよ。次は、お前の番だよ」

術前の検査で出血がかなり多いことがわかった。手術時間は十数時間にも及んだ。手術が終わると、担当医が研一さんに告げた。

「脳はかなり損傷を受けています。どこかに障がいが出るのは覚悟してください」

実は律子さんには先天性の脳動脈瘤(AMV)があり、それが原因で脳出血を起こしていたことが手術をして明らかになった。

障がいが残るといふショックよりも、とにかく助かったという気持ちが強かった。

「助かってよかったと、そのときはそれしか考えられませんでした」

手術室からICU(集中治療室)に移った律子さんには、人工呼吸器がつけられ、体にはいくつものカテーテルなどがつけられていた。

研一さんは、術後しばらくは目を開け、言葉に反応してくれないうちに感じたという、時が経つにつれ、反応もなくなっていった。そして、いまも意識不明の状態が続いている。奇しくも9月23日は1年前にふたりが初めて出会った日、研一さんが律子さんに一目惚れした日だった。



律子さんは料理が得意で、研一さんの好きなカレーライスをよくつくってくれた。



受け入れを拒否した杏林大学医学部附属病院の記者会見。研一さんは怒りを募らせる。